

リンゴ黒星病に対する「トリフミン水和剤」および「バイコラール水和剤」の使用法 (園試 環境部)

1. 背景とねらい

MBC耐性菌の出現以来、リンゴ黒星病に対する有効な防除薬剤は少なく、対応に苦慮していることから、その検索と並に、新規薬剤の中で2・3の有効と思われる剤を見出し、それらによる防除実証試験を行ってきた。今回そのうちのトリフミン水和剤とバイコラール水和剤が登録と取得したので、使用法について明らかにした。

2. 技術内容

- 1) 両薬剤ともに使用濃度は3,000倍とする。
- 2) 前年の多発園や開花期中に不順天候が予想され、多発するおそれのある場合には、開花期前および落花期の2回散布する。
- 3) 前年の少発園や未発園では、従来の防除薬剤で対応してよい。しかし発生の増加や拡大のおそれがある場合には、開花期前に両薬剤のいずれか1回散布する。

3. 指導上の留意事項

- 1) 両薬剤とも既登録のバイレトン水和剤およびサプロール水和剤と同系統の薬剤なので、耐性菌の発現を回避するために、これら4薬剤をあわせて総使用回数と2回とする。
- 2) 両薬剤とも感染後に散布しても胞子形成を抑制する、いわゆる治療効果がある。しかし発病が増加してからの使用では、従来の防除薬剤よりも効果は優るものの、十分な効果は得られないので、開花期前後の使用を基本とし、予防的に散布する。
- 3) 他病害に対する防除効果は、トリフミン水和剤がうどんこ病と赤星病に、バイコラール水和剤が赤星病にそれぞれ有効で、同時防除が可能である。なお斑葉落葉病に対しては、両薬剤とも発生初期であれば防除効果が認められる。

4. 参考文献・資料

- 1) 昭和57~61年度 岩手園試「園芸作物の病害虫に関する試験成績」
- 2) 昭和60年度 秋田果試業務報告 p.161
- 3) 昭和55・57年度 リンゴ農薬連絡試験成績書

5. 試験成績

表-1 リンゴ黒星病に対する防除効果 (60年度試験)

供試薬剤	調査葉数	発病葉率	発病果率
トリフミン水和剤 3000倍	600	19.0%	6.8%
バイコラール水和剤 2500倍	600	9.1	4.0
オーソサイド水和剤 800倍	600	42.1	2.2
無散布	600	75.8	50.3

表-2 リンゴ黒星病に対する防除効果 (61年度試験)

供試薬剤		調査葉数	発病葉数	発病葉率
トリフミン水和剤	2000倍	600	5.5	0.9%
トリフミン水和剤	3000倍	600	8.0	1.4
バイコラール水和剤	2500倍	600	9.5	1.6
サプロール水和剤	500倍	600	66.5	11.1
ダイホルタン水和剤	1500倍	600	14.5	2.4
オーソサイド水和剤	800倍	600	59.5	10.0
無散布	—	600	366.0	61.0

表-3 散布時期別発病調査

トリフミン散布時期			6/12		6/23		7/1		7/17	
開花直前	落花期	7月上旬	A	B	A	B	A	B	A	B
○	—	○	3.3	0.4	21.3	2.5	25.3	2.9	38.0	4.2
—	○	○	12.0	1.9	16.0	2.0	24.0	2.9	32.7	3.8
○	○	—	1.3	0.1	2.0	0.2	16.0	1.6	22.0	1.9
○	○	○	2.2	0.3	4.7	0.5	16.1	1.5	21.0	2.0
無散布区										61.0

A: 発病新梢率 (%)

B: 発病葉率 (%)

表-4 散布時期別発病調査

バイコラール散布時期			一樹当り発病新梢数			発病果数
開花直前	落花期	落花10日後	6/6	6/16	7/2	7/2
○	—	—	5.3	25.0	30.1	3.7
—	○	○	25.3	39.6	55.3	10.6
○	○	—	6.6	10.4	26.9	5.8
—	—	—	21.4	39.3	75.0	13.0